

第 18 回 伊賀市非核平和推進 中学生広島派遣事業 報告書

2024（令和 6）年 8 月 5 日（月）・6 日（火）



伊賀市・伊賀市教育委員会・伊賀市中学校長会

第 18 回 伊賀市非核平和推進

中学生広島派遣団 派遣生徒 紹介

崇広中学校

奥本 陽菜



緑ヶ丘中学校

長辻 唯花



城東中学校

小川 紗雪



上野南中学校

松生 彩希



柘植中学校

中嶋 芽衣



霊峰中学校

丸山 姫依



島ヶ原中学校

井村 天喜



阿山中学校

高田 希咲



大山田中学校

山極 莉亜



青山中学校

森 煌平



伊賀市非核平和推進中学生広島派遣事業 事業行程

7月29日(月)

事前学習会



8月5日(月)

出発式



8月6日(火)

解散式



8月25日(日)

報告会



1日目 8月5日(月)

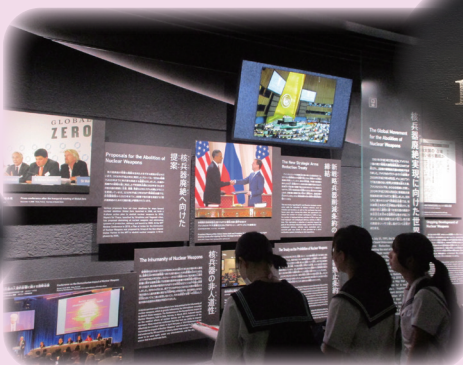
被爆体験講話

13歳の時、食糧増産で農村支援出動先の東広島市から広島へ向かう途中、原爆炸裂の閃光を見て広島市へ入った新井俊一郎さんにお話を伺いました。



平和記念資料館見学

様々な資料などの展示から、原子爆弾の悲惨さを実感しました。



1945年8月6日
August 6, 1945

折り鶴の献納・原爆ドーム等見学

市内の公立中学校の生徒一人ひとりが平和への祈りを込めて折った折り鶴を、原爆の子の像へ捧げました。

また、核兵器の廃絶や平和のシンボルである原爆ドームや、被爆アオギリなどを見学しました。



2日目 8月6日(火)

平和記念式典参列

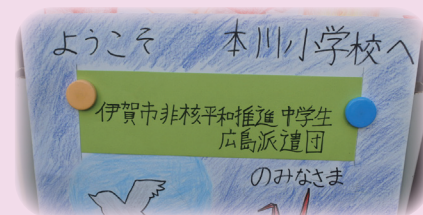
広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式に参列しました。

こども代表の小学生の言葉から、平和に対する強いメッセージを受け取りました。



本川小学校見学

爆心地に最も近い小学校として、大きな被害を受けた本川小学校の平和資料館を見学しました。



おりづるタワー見学

おりづるタワーの展望台から、現在の広島市の街並みを眺めました。

また、平和への祈りを込めてみんなで鶴を折りました。



崇広中学校 奥本 陽菜

私が広島へ行き、心に残ったことは、被爆体験講話と本川小学校平和資料館の見学です。

今回は、中学1年生のときに被爆された新井さんにお話を聞きました。新井さんの父は、明日があるか分からない、だからもし死んでしまったときに新井という家族がいたという証を残すために家族4人で写真を取り、配ったそうです。私が家族写真をとるのは、ほぼあたり前だけど、それを生きた証と話されていて、とても驚きました。その後、原爆が投下され、やけどをおった人々が防火水槽につかって亡くなっていたり、自分の皮膚をぶらさげている人等を見たそうです。中には顔が2倍以上にはれ、目鼻口がへこんでいる姉妹も見たと。その2人を見て、新井さんは初めて地獄のふちから地獄を見たと思ったと言っていました。新井さんは、原爆とは、生きたまま人を殺すものだと言っていました。

また、本川小学校平和資料館では、原爆が投下される前の生徒の写真や、投下された時の壁などが展示されていました。生徒たちの写真では、皆が楽しそうに授業を受けていたり、遊んでいた写真がありました。私はその写真を見て、戦争は小さな子どもたちの命や笑顔をうばった最低なもので、絶対に無くしていかないといけないものだと思えました。

今回の広島派遣を通して、戦争は戦争中も戦争が終わった後も、たくさんの人々を苦しめたもので、平和な世界には不要なものだと思いました。戦争をなくし、平和な世界にするために、私は新井さんに聞いたお話や資料館で見たものをいろんな人に伝えていきます。

緑ヶ丘中学校 長辻 唯花

まずはじめに、私は8月5日、6日に伊賀市非核平和推進中学生広島派遣事業に参加して、79年前、広島が被爆したことについて学んできました。

1日目は、当時13歳で被爆を体験した新井俊一郎さんにお話を聞きました。新井さんは全身赤裸で、うでの皮が手先までべろんとはがれている人々を見たこと、家に帰ると家族が息をひきとっていたことなどを話して下さいました。新井さんはお話の最後に、「広島まで来てくれてありがとう。今話した事はもう広島、長崎だけの問題ではなく人類の問題になっている。」

と言っていました。

私は、はじめて広島の被爆についてくわしく知りました。そして、今私たちができることは、このお話を次は私たちが語りつぐことだと気づきました。私たちは戦争を体験したことはありません。しかし、戦争をゆるさないという意志は確かにこの派遣で芽生えました。

2日目は、おりづるタワーへ行きました。みんなでつるを折り、ガラスばりの場所につるをおとしました。おりづるがたくさんあって、私たち以外の人たちも平和を願い、つるを折ったんだと実感しました。

2日間を通して、戦争の悲惨さについて学びました。この派遣を生かして学校のみんなや家族にかたりつぐことを続けたいです。

城東中学校 小川 紗雪

私が広島派遣に行き心に残った言葉は、平和記念式典で聞いた「覚悟をする。」という言葉です。私は学校で原爆のおそろしさ、戦争の悲惨さについて学びました。その中で私がこれからできることは、学んだことを一人でも多くの人に伝えていき、二度と同じあやまちをくり返さないようにしていくことだと思っていました。ですが、式典で「覚悟」という言葉を聞き、私はそれだけではないと思いました。そして、「これから平和を創っていく一人」という覚悟が足りていなかったことに気づき、私ができることはたくさんあると思い直しました。「これから平和を創っていく一人」として後世に伝えるだけでなく、家族、友達など身近な人に伝えること、そして戦争の歴史や悲惨さについて、学び続けようと覚悟をしました。

また、広島平和記念資料館を見学して、私は家族や友達を大切にしていきたいと思いました。資料館に展示されていた日記には、昨日まで一緒に勉強をしていた友達、今まで一緒にご飯を食べ、過ごしてきた家族などを、たった一発の原爆でなくしてしまったり、今まであたりまえに過ごしていた日常が変わってしまったりした記録が残されていました。私は今、あたりまえに友達と勉強ができ、家族と過ごせています。しかし、それは決してあたりまえのことではありません。多くの人の思いや努力によって平和が創られていることを、広島派遣で実感しました。そして、私も平和を創っていく覚悟を持ちました。



上野南中学校 松生 彩希

私が、中学生広島派遣事業に行って印象に残っていることは、被爆体験講話と、本川小学校平和資料館です。

1日目の被爆体験講話では、新井俊一郎さんにお話をうかがいました。広島市方面から、赤はだかでゆびの先から皮がただれている人が歩いてくる様子や、防火水そうにびっしりつまって蒸し焼きのようになった人たちがたくさんいたという話を聞いて、とても大きな衝撃を受けました。今まで原爆について学んできましたが、自分が、あまり深く理解できていなかったことに気づきました。新井さんの体験から、当時の様子や戦争、原爆の悲惨さが心にしみてきて、二度と同じことを繰り返してはいけないと強く思いました。

2日目の本川小学校平和資料館では、原爆によって変形したお弁当やガラス、鉄のかたまりや石を見ました。あの一発で、3,000度から4,000度まであがり、あっというまに、とけ焼け変形するという威力の大きさを実感しました。今でも50センチメートルほど耕せば原爆の被害を物語るものが見つかるということに、おどろくとともに、一瞬のうちにすべてをなくしてしまうほどの威力の大きさを感じ、恐ろしくなりました。

今回広島派遣に参加して、私の中での平和への意識がより高まりました。今現在、世界では戦争が絶えず、つらい思いをしている人がたくさんいます。そんな人たちのためにも、世界の未来のためにも、次の世代を担う私たちが、平和への願い・思いを伝えていきます。

柘植中学校 中嶋 芽衣

私が、広島派遣に行って一番印象に残っていることは、原爆の子の像への折り鶴献納と、平和記念式典です。原爆の子の像の所には、透明なケースがあり、たくさんの折り鶴が献納されていました。自分の中学校で作った鶴を献納するとき、かける場所がないほどいっぱいでした。こんなにたくさんの人が「平和」を思い、折ったんだなと思いました。私も、「もう二度とこんな戦争が起こりませんように」と気持ちを込めて折り鶴を献納し、原爆の子の像の鐘を、「これからも平和にすごせますように」と願いながら鳴らしました。

そして、平和記念式典では、小学校6年生の子から平和の誓いが伝えられました。小学生とは思えないくらいはっきりしゃべっていて驚きました。言ってくれた「願うだけでは平和はおとずれません」という言葉が心に残っています。

私は、8月6日に毎日黙祷をすると決めました。それは、戦争のことを忘れず、平和な社会をつくるために自分にできることを考えつづけるためです。そして、私も願うだけではなく、「戦争は昔のことではなく、今も苦しんでいる。だからこそ、私たち一人ひとりが自分事として考えていこう」と、学校の人々に伝えていきたいです。

霊峰中学校 丸山 姫依

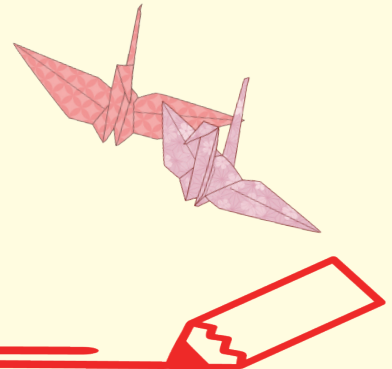
原爆の子の像の前に献納するために、全校のみんなで折り鶴を折りました。世界から戦争がなくなるように、広島で起こったことを忘れないように心を込めて折った鶴を持って行きました。修学旅行で広島を訪れた私にとって、この場所に来て鶴を献納するのは2回目でした。被爆された方々に、もう二度と同じ過ちをおかさないようにという思いが届くように、貞子さんのもとに千羽を超える鶴を送りました。たくさんの折り鶴が、この広島で起こったことを忘れてはいけないと伝えているように感じました。

これから先、経験することはないかもしれない平和記念式典にも参加させていただきました。小学6年生の2人が、子ども代表として平和への誓いをしました。たった一つの原子爆弾により大人も子どもも動物も建物も失ってしまいました。夢も希望もこの先の明るい未来もなくなってしまいました。被爆された方は、思い出すのが辛いほど、苦しく忘れられない日になったそうです。そんな戦争を私はなくしたいと思いました。戦争がなくなれば平和は築けないと思います。平和の誓いの中に、「願うだけでは、平和は訪れません」とありました。子どもたちの未来のために、誰もが笑顔で過ごせる世界になるように、小さなことでも自分ができるところを探し、広島に行って学んだことを家族や学校の人々に伝えたいと思います。そして、平和の尊さや命の重みについて考え、受け取ったバトンを繋いでいけるように学び続けていきます。

島ヶ原中学校 井村 天喜

私は平和式典で子ども代表の平和への誓いが一番心に残りました。自分より年下だと思えないくらい堂々と、語りかけるように伝えてくれました。中でも「願うだけでは、平和はおとずれません。」という言葉が心に刺さりました。私は今まで、「戦争がなくなりますように」など、世界平和を願うばかりで、行動してみようと思ったことすらない事に気づかされました。実際、以前アンケートで「核兵器をなくすために自分に何かできることがあると思いますか」と聞かれたとき、「どんな人でも全ての核兵器をなくすことは難しいと思う」と回答しました。しかし今は、「これからの世の中を作っていく私たちが、あきらめてはならない」と考えるようになりました。

それから、「一人ひとりが相手の話をよく聞くこと」「『違い』を『良さ』と捉え、自分の考えを見直すこと」についても伝えてくれました。きっと世界中の全ての人がこの2つができたとき、本当の平和がおとずれるのだと思います。これらは誰でもすぐに取り組めることなので、この取り組みを自分はもちろん、学級、学校全体へと広げていきたいです。



阿山中学校 高田 希咲

広島派遣事業で心に残ったことは、被爆体験講話とおりづるタワーです。

被爆体験講話では、当時13歳で被爆された新井俊一郎さんから話を聴かせていただきました。お話の中で「遺言を残すために講話で話している」という言葉が心に響きました。新井さんからは、思い出すことすら辛い、まさに地獄のような被爆当時の光景が語られました。それは、「原爆が炸裂した瞬間、空気が燃えた感覚だった」「地面から火山が噴火したようだった」と聴きました。その感覚は私には想像できません。ただ、それほどに苦しい経験をするはずのない人たちが体験させられたことは、辛く悲しいことだと感じました。今私にできることは、このことを家族や友だちに発信していくことだと思います。

おりづるタワー展望台では、平和への願いを込めた鶴がたくさんありました。私も鶴を折りながら平和について向き合える時間になりました。

私は、この2日間で戦争が間違った行為であることを改めて学ぶとともに、平和の尊さを学びました。戦争は、勝ったから正義、負けたから悪ではないのです。戦争という行為自体が悪であり、悲しみを増やすだけなのです。今、戦争をしている国にも間違いに気づいてほしいし、世界全体が平和になってほしいと強く思いました。そして、今回の経験から学んだことを私たちが家族や友だちと話し合うことで、平和な未来につなげたいと思います。

大山田中学校 山極 莉亜

私は、伊賀市非核平和推進広島派遣事業に参加し、多くの学びを得ることができました。その中で、とても印象深く、私の心の中に残っている出来事は2つあります。

まず1つ目は、広島平和記念資料館に行ったことです。資料館に入っすぐ、私の目に飛び込んできたのは、壁一面の焼け野原でした。当時の、原爆の悲惨さを目の当たりにしました。被爆者の方々の遺品の数々。地獄とも言えるような生々しい絵や写真。どれもが、「もう二度と同じあやまちを繰り返さないように」とすべての人にうったえかけているようにさえ感じることができました。

2つ目は、平和記念式典に参列したことです。今までテレビの中でしか見たことのなかった式典に参列したということも一つの大きな理由でもあります。それ以上に平和学習の時に必ず見てきた、子ども代表の平和への誓い。小学校6年生の子たちが、一から自分たちで文を考え、感情をこめてうったえかけるその姿はとても印象に残っています。79年前、同じ時間に落ちた原子爆弾。黙とうで目をつぶると、当時の地獄が見えたように思いました。

「もう二度と同じあやまちを繰り返さない」生き残った被爆者の方々の願いを実現させるためにも、私たちがこれからも後世に語り続けていこうと心に決めました。

青山中学校 森 煌平

折り鶴の献納を終えて、原爆ドームを見学しました。原爆ドームは、鉄骨で補強されていたり、当時の様子を保存したりして、後世の私たちに原爆のむごたらしさを伝えるために、「残すための努力」がされていました。これまで戦争のことについて学習してきたけれど、原爆ドームを見学し、「戦争は実際に起きたこと」だと痛感しました。

被爆体験講話で新井俊一郎さんから当時のお話を聞きました。新井さんは、被爆者の方々が、高齢により年々減っている現状について、私も92歳になって、これがラストメッセージだと言っておられました。こうやって「実際に起こったこと」を今を生きている私たちが受けついで、伝えていかなければいけないと強く感じました。

原爆ドームが、当時の姿で残り続けていることの意味や、新井さんから託されたバトンを、身近な人たちに発信し、つなげていきたいと思います。

